法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-02

地域コミュニティとアート ｖｏｌ．６ 「宮前正樹とｗｏｒｋｓｈｏｐ」

大榎，淳 / 稲垣，立男 / 鈴木，正美

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化 / 異文化
(巻 / Volume)
13
(開始ページ / Start Page)
68
(終了ページ / End Page)
113
(発行年 / Year)
2012-04
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007862

Hosei University Repository

地域コミュニティとアート vol.6

「宮前正樹とworkshop」

●日　時：2011年12月14日㈬　17:30分～ 19:50
●場　所：法政大学市ヶ谷校舎ボアソナードタワー３Ｆ
　　マルチメディア教室
●パネリスト：
　大榎淳（メディアアーティスト・東京経済大学コミュニケーション学部准教授）
　鈴木正美（新潟大学人文学部教授）
●進　行：稲垣立男（アーティスト・法政大学国際文化学部教授）

宮前正樹は多摩美術大学在籍中の 1980 年代にアーティストとしての活動をスタートさせた。絵画・映像・パフォーマンス・アクション・ワークショップなど幅広くその表現やメディアを変化させながら作品を発表し続け、2000 年に稚内北星学園大学に教授として迎えられた直後、わずかな期間に講義・実習を行ったのち他界してしまった。生前の宮前の作品やワークショップなどの活動はその発表当時それぞれが高く評価されており、没後 10 年を経てそれら全体を見通して再検証すべき時期にあると思われる。また、それぞれの時代と寄り添うような宮前の活動を検証することは、同時代のアートシーンや時代について再考することに他ならない。

稲垣立男（アーティスト・法政大学国際文化学部教授　以下稲垣）　会場にいる学生の皆さんは宮前正樹の名前を聞いたことがないと思います。もう亡くなられて10年になりますが、1980年代から90年代にかけて、東京を中心に美術家として活動されていた人です。日本画からスタートして、90年代の初旬からワークショップを盛んに行い、様々なメディアにアプローチされていました。2000年には北海道の稚内にある稚内北星学園大学に教授として迎えられることになります。そして赴任してわずか一カ月で、癌で亡くなられました。当時の学生や教職員のみなさんにはショックな出来事だったろうと思います。

宮前さんが亡くなられた稚内の大学には宮前さんの後任教員が入

Hosei University Repository

り、後任の方が退任された2003年、私は稚内の大学[1]に赴任することになりました。稚内では宮前さんと宮前さんの同僚であった二人の教員が作られた「メディアと表現」コースのカリキュラムを追体験し、その内容を消化していくという時間を過ごしました。私自身も大学教員としてスタートを切ったばかりで、宮前さんの考えたカリキュラムと格闘する中で考えなければならないことがとても多かったことを覚えています。地方の、人の少ない所でとても新鮮な美術教育のプログラムが組まれていたということに非常に驚きました。

彼の痕跡を、時代を追って追いかけていくと、アーティストとしての活動形態や80年代、90年代と現在との美術に対する考え方の変化が宮前正樹という鏡に映されて見えてきます。宮前さんは、時代を意識しながら美術と関わってきたということがあると思うので、そういうことをすごく感じるわけです。

僕自身、2005年くらいから宮前さんのことについてなにか始めたいと考えていたのですが、自分と宮前さんの距離がものすごく離れたり近寄ってしまったりと、なかなかうまくつかまえられなくて、それで何年も過ぎてしまいました。それから自分が東京に戻ってきてここ（法政大学）で教えたり作家活動をする中で、宮前さんのことをもう一回考えることができるかもしれないと思ったわけです。

今回は、宮前さんが稚内に来る以前から親しくされていた東京経済大学コミュニケーション学部准教授の大榎淳先生と、稚内で一緒にカリキュラムを作り、現在は新潟大学人文学部教授をされている鈴木正美先生にお話しをうかがいます。私は生前の宮前正樹さんのことをほとんど知らないので、以前からおふたりには是非お話しを聞いてみたいと考えておりました。

これから最初に鈴木正美先生に稚内時代のお話しいただいて、また映像資料もご用意いただいています。その後に大榎先生にお願いしたいと思います。

最初に鈴木先生、よろしくお願いします。

Hosei University Repository

鈴木正美（新潟大学文学部教授　以下鈴木）　鈴木正美です。ご紹介いただいた通り、新潟大学の人文学部で教えています。普段何をやっているのかというと、これは宮前さんとの接点にもなるんですが、最近はロシアのジャズの研究ばかりやっています。去年も2カ月ほどモスクワに行って、こんなことをしていました。

〈ジャズ演奏の映像上映〉

一番右側にたいへん立派なひげの人がいましたけれど、セルゲイ・レートフ[2]というマルチリード奏者で私の友人です。実は一昨日まで日本に、12月2日から10日間いて、研究会や講演会の他に都内で6カ所ライブをやったりしていました。この間彼にずっと付き合っていたので、私はまだヘトヘトなんです。ロシアに行って、こういう人たちと現場でお付き合いしながら、1970年代から80年代、現代までのロシアのアンダーグラウンドの文化をフィールドワークし、研究しています。研究対象としているのは音楽と美術、そして現代の詩です。いろいろなアーティストや詩人、音楽家と付き合っているんですが、宮前先生との接点というのは、たぶん音楽にあるはずだったんです。

稚内という日本で一番北の町があるのですが、天気のいい日は宗谷岬からサハリンが見えるという所なんです。そこにある大学（稚内北星学園大学）は、短大だったんですけど四年制に移行するにあたって新規に教員募集をしたわけです。私は当時、いろいろな仕事を掛け持ちしながら半ばフリーターというか、大学の非常勤を3コマ、世界文学事典の校閲、倉庫で荷物運びをやりながらついでに子育てもして、奥さんが家に帰ってくるのをご飯を作って待っているという生活をしながら、一方で音楽もこっそりやっていたんです。

その稚内の大学が教員を公募していた時に、私や宮前さんが応募して採用されました。採用されたのは1999年でした。それから四年制大学が開学する2000年の4月まで、宮前さんや、もう一人、藤木正則[3]先生という方がいらしたんですが、私も含めたその3人と、学長である丸山不二夫[4]先生という方と四人でメールのやりとりやら電話やら、

Hosei University Repository

資料１

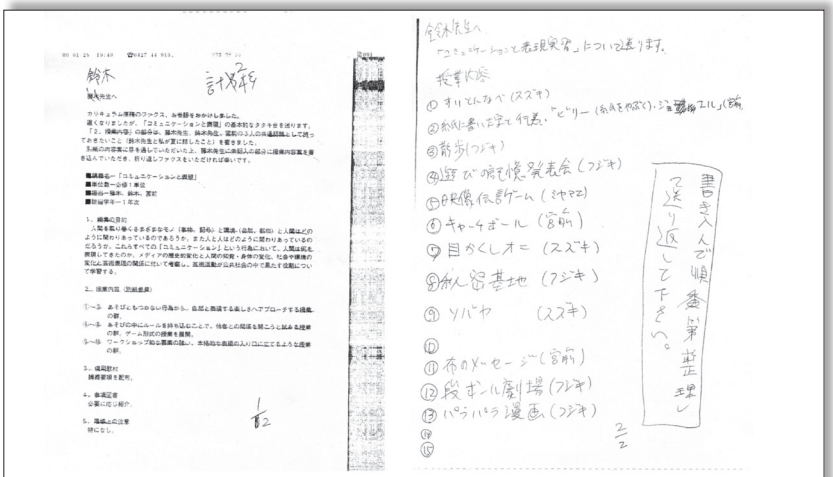
実際に会議をしたりして、どんなカリキュラムを作るべきかという話を何度もしたわけです。そこからがわけ分からないというか、私にとってカリキュラム作りはまったく初めてのことだったので、暗中模索が続きました。

当時の宮前さんの写真（資料１）なんですが、私もこのころはだいぶ頭に髪がありましたね。宮前さんもあの時は42歳かな、私が39。そしてどんなカリキュラムにするべきか、藤木先生と3人で話し合いました。この大学というのがコンピューターの技術者を育てようというのを第一の目標に掲げている大学でした。ですからJavaというプログラム言語を必修で習わせる。IT業界に打ってでるような人材を育てるというのが目標だったんですが、当時の学長の丸山先生は、とても先進的な考えがあって、コンピューター技術だけでは絶対にすぐ脱落していっちゃう、コンピューター以外のこともできる教育をしないとIT業界では絶対に生き残れないと主張していました。だからソフト

Hosei University Repository

ウェアの勉強以外にも著作権の問題などの「メディアと社会」、コンピューターを使ってさまざまなマルチメディア技術を駆使した作品作りや映像制作といった「メディアと表現」という分野、そうしたことにも関われる人材を育てるべきだと考えていた。「メディアとソフトウェア」「メディアと社会」「メディアと表現」という3つの柱を基軸にして4年間のカリキュラムを作るということで、「メディアと表現」については宮前先生と藤木先生と私の3人でカリキュラムを考えることになったわけです。コンピューターに関わりつつも、どうやって表現の世界に入っていってくれるようになるのか、ということで話し合いながら、いろいろな授業を組み立てているうちに書いていたメモや宮前先生から送られてきたファクスが、たまたま本棚から出てきたので、ここに挙げました。

3人で何度も話し合ったのが、とにかくいきなりコンピューターに



- 1999年に稚内北星学園大学への採用が決まり、3人による授業案のやりとりが始まる。

資料2

Hosei University Repository

触るような授業をしたくないということでした。体が資本なんだからうんとアナログなところからやっていこう。最も大事なのは、他者とどう関わるか、自分一人で引きこもりになっちゃうようなプログラマーにはなってほしくない。宮前さんは「ノートパソコン持って、ビデオカメラを持って、世界中を飛び回って、世界中のあちこちから自分の作品や情報を発信していくような学生たちにしたいね」っていいことを言ったんですね。で、その時に宮前さんが「俺、ロックバンドやってまして、ギター弾くんですけど」という話になって「私、サックスやってます。一緒にいつか演奏しましょうね」って…。それで私はいっぺんに宮前さんが好きになってしまったような気がします。一緒にバンドをやることを私は楽しみにしていたんですが、それはついに実現しませんでした。

カリキュラムの内容というのは、お手元にある資料の3枚目（資料2）にありますね、ここに映っている授業の目的というのは後から書かれたもので、最初に書かれたのはこっちの方が先なんですよね。

実はその、授業の目的の最初に書かれた部分というのは、2枚目のプリントにある「コミュニケーションと表現」の方の授業の目的、これが最初でした。「コミュニケーションと表現」の授業の目的というのを3人で考えた時に、これだけじゃちょっとまずいよね、私が講義を担当するにしても、3人で何か実習的なことをすべきだという結論に至りました。そしてお手元にある3枚目のプリントの授業の目的に書かれたような、「人間はこれまでコミュニケーション行為としてさまざまなメディアを生み出し、そして展開してきた。とみに情報化が叫ばれ、メディアの情報化が加速してきているが、それは長大な人類史にあたるほんの一部にすぎず、新たな始まりの予兆かもしれない。この授業ではデジタルメディア表現の基礎として言語と平面、立体、空間、身体に関わる造形的トレーニングや野外学習などを交えながら柔軟な体験を実習として学習していくのが目的である」と、これは後から付け加えられた文章。この時に3名がアイデアを出し合って、こ

Hosei University Repository

んなことやろう、あんなことやろうと、宮前さんがメモを取って、それをまとめたのがこのメモでした。それが実際に固まったのが、その3枚目のプリントの右側にある授業内容になったと記憶しております。

こんなことをしながら、最初は「表現基礎実習」って言っていたのですけれども、何かしっくりこないなといったときに「一番大事なのはやっぱりコミュニケーションだよ」ということになりました。

今は何でもコミュニケーション、コミュニケーションといっていることに、私はすごく違和感があります。企業で喧嘩せずにうまく仕事ができるってことがコミュニケーションのような感じがしてしまうのですけれど、そうじゃないと思うんですよね。私たち3人が考えていたコミュニケーションというのは、もっと根源的なものじゃないかと思います。なぜ私たちはいや応なく他人と関わってしまうのか。他者がいないと自分がいられないということ。私だけでは私ではない。つまり、私とあなたがいる、あなたがいて初めて私が私になれるということです。私とあなたという「私たち」がいるということ、そしてそれをまた見ている第三者がいる。あなたは誰なのか、私は誰なのか、そこを問うていくというのは、宮前先生が作品の中でずっとやっていたことなのですが、私が私であること、そしてあなたがあなたであるということを根源的に感じていけるような、その導入になるような実習をやらなきゃいけない。だからコミュニケーションって言葉は大事だよね。単に通じ合うとかそういうことじゃないんだ。

そんなことをしている途中、私は参加しなかったんですが1999年10月に、この稚内北星学園がまだ短大の時、宮前先生と藤木先生の二人が体験入学を担当しています。私は現場を見ていないのですが、話だけは聞いているんですね。体験入学の時に学生たちの作った物や持ってきた物などをガチャポンのカプセルに入れた。ガチャポンもまた藤木先生が自前のを持っていて、そこからカプセルを一人ずつお金を入れさせて出させるということをしたらしいんですね。ドラム缶、プロパンガスの缶かな、藤木先生が溶接工の資格を持っているんで自分で

Hosei University Repository

作ったらしいんですけど、そこにカプセルを入れて、地面に埋めてタイムカプセルにした（数年前みんなでまた掘り出したそうです）。この体験入学に参加した学生たち、聴講生たちの多くが翌年、新設の稚内北星学園大学に入学することになりました。ですから多くの学生がすでに宮前先生に接していたわけです。先ほど宮前先生の思い出を語ったそのころの学生たちの作文を読ませてもらいましたが、この時のことをよく覚えている子がずいぶんいてちょっと驚きました。

そうしているうちに、また宮前さんからファクスが届くんです。どんな授業やるかなんて、結構綿密に考える人だなと思いました。私は音楽関係の方とはかなり一緒に仕事をしていたのですが、アートの人と仕事するのは初めてでしたし、宮前さんが書かれていたことがすごいまじめでしたから、どうしたものだろうってずいぶん悩みました。そして、新設の大学の最初の授業の4日間を使って、「メディアとソフトウェア」「メディアと社会」「メディアと表現」それぞれ1日ずつ、最後の4日目はまとめという形で、その3つの柱の授業を1日3コマずつ入門的な講義としてやる「情報メディア入門」という講義の中の「メディアと表現」入門編にあたる授業、その構想が書かれたファクスが届きました。

それを読むと、要はそれまでアートがアートでいられた、芸術が芸術でいられたものが、近代化、現代になっていったときに、作品そのものでは売れっこなくなっていた。そこに付加価値としていろいろな情報や記号を足すことで商品化していくという流れがあった。それをバウハウス等で、例えば車を流線形にすることで恰好いいというイメージを作ってそれで商品が売れる。ディズニーランドの話も出てくるのですけれど、土地というものに新たな情報を付加することでそれを売り物にしていく。じゃあアートはどうなるんだという問いかけがここに書かれていたのですが、この話を一年生にいきなりしても分かるのかな、困ったな、なんて思いながら当日に至るわけです。実際にバウハウスのデザインとかを見せながらこの授業をやりましたが、学生

Hosei University Repository

はそのへん、作文読んでも全然覚えていないようで、覚えているのは、その後にやった「フロッタージュ」でした。

「情報メディア入門」は2000年の4月7日から11日にやりました。「メディアとソフトウェア」「メディアと社会」「メディアと表現」の3分野による入門講義。「メディアと表現」で「フロッタージュ」を行いました。宮前さんの言い方では、「大学の建物、大学と友だちになろう」。すごいなあ、大学という空間そのものと友達になろう、接し合おうということですね。大学のあらゆる建物、あちこちの場所に自由に好きなように行って、擦りまくる。物理的な大学に、そのまま直に触れ合うということをやらせようとした。その前に藤木先生がいろいろな作家のフロッタージュ作品を見せたり、私がエルンストの絵を見せて若干の説明をしました。学生たちは初めて大学という建物の中を擦りまくったことを、とても喜んでいました。みんな嬉々として擦ってましたね。最後に擦った作品をみんなで見合うという授業でした。

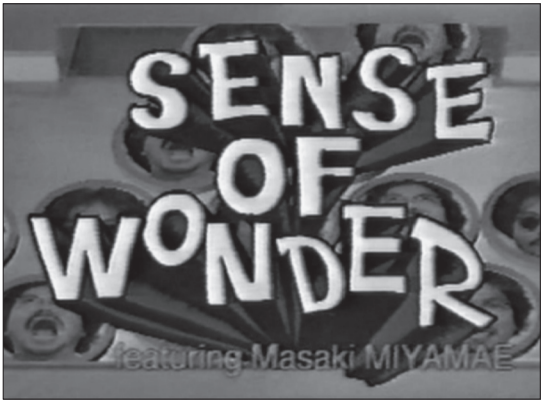
そして単純に擦るだけじゃなくて、今、君たちが何をやったのかということを宮前さんが説明するにあたって見せたのが、「SENSE OF WONDER」という次の映像です。これは1993年にBSでやっていたんですけど、たまたまビデオのダビングをいただいたので、そこからとってきたので画面が粗いですけど、それの焼きトウモロコシ篇（資料３）をお見せします。

これは宮前先生がコンピューターを操作しながら絵を描くのですが、どんな絵を描くかは知らされていません。まったく分からない状態でそれぞれ視覚、聴覚……みんな五感それぞれの役割を与えられた5人の外国人たちが、その物について、その知覚を言葉で表現したのを聞きながら、宮前先生がそれを絵にしていくという番組だったんですね。これもすごい。私も見ていてのけ反りました。

これをフロッタージュした後で学生たちに見せて、五感というのは大事なんだよって宮前さんは説明しました。

その時に、今見せている図（資料4）ですが、SMCRモデル[5]、Send

Hosei University Repository



私たちは人間の五感を代表する5人です。私、視覚ちゃんが街で見つけたふろしきの中身について、5人が話をします。

視覚ちゃん「今日のお題はこれでーす」

ふろしきの中味に関する私たちの話を聞いて、アーティスト宮前はCGで絵を描きます。

宮前「僕が宮前です」

この中味を知らないのは彼だけです。

「これに関する思い出やエピソードを教えてください。はい、聴覚」

聴覚くん　「畳の部屋で寝たことを思い出す音」

嗅覚ちゃん「花火を見るときに食べるモノの匂い」

味覚くん　「一日中歩きまわって全身ベタベタになって、
その後焼き鳥屋さんで食べる、ベタベタ油っぽいモノの味」

触覚ちゃん「荷物を包むエアパッキンみたい」

視覚ちゃん「夏祭りでよく買ってもらった。でも、地面に落として泣いた」

宮前　「プチプチして、しょうゆで、焼き鳥、甘くて熱い……、
お祭りに買ってもらうもの。イカ焼きかな？」

視覚ちゃん「じゃあ、その感覚を具体的に語っていただきましょう」

聴覚くん　「ドブドブ、ドブド」

嗅覚ちゃん「一ヶ所は、バーベキューの匂い。もう一ヶ所は、甘い匂い」

資料３「SENSE OF WONDER」（1993）。次ページにつづく

Hosei University Repository

視覚ちゃん「絵本に出ていたロケットに似てる」
宮前　　「皆さん、もうお気づきだと思いますけど、なんとなく
　　惑星の集団に見えませんか？」
味覚くん　「竹のような味」
触覚ちゃん「すごく小さな風船が集まってる感じ」
視覚ちゃん「黄色と茶色のコントラストがハッキリしてる、
　　つぶつぶがいっぱい」
（イメージは烏賊だ）
視覚ちゃん「そのつぶつぶは一定の法則を持っている」
宮前　　「わかった。バナナのチョコレートかぶしたやつだ。
　　あ、おいしそ。こんな感じかな。ちょっと散らすやつが、
　　こう、ね。つぶつぶがついている。これを法則的に
　　まくやつがいるか？しかし。はい。自信作です」
全員　　「答えは、焼きトウモロコシです」
宮前　　「焼きトウモロコシに見えませんか？　皆さん、これが。
　　私には、これと焼きトウモロコシの違いがわかりません。
　　あれ、不思議だな、これはなんだ。なんなんだか、
　　焼きトウモロコシでしたー」

資料３「SENSE OF WONDER」（1993）

とMessageとchannelとreceiveですか、受け手の間にいろいろなメッセージを司るさまざまな5つのチャンネル、五感があるということを示し、その五感をフルに意識して、体全体を使って、世界と関わり合うことがとても大事なんだということを強く言っていました。

その五感を意識するというのは、1995年にやはり宮前さんが作られた「脳CHASER」（資料5）という、やはりBSでやっていた番組があるのですけれど、これも見ていただくとよく分かると思います。これも映します。こんな、メディアスーツというカッコイイのを着るんですよ。

五感を増幅するメディアスーツというのはとても面白いと思いま

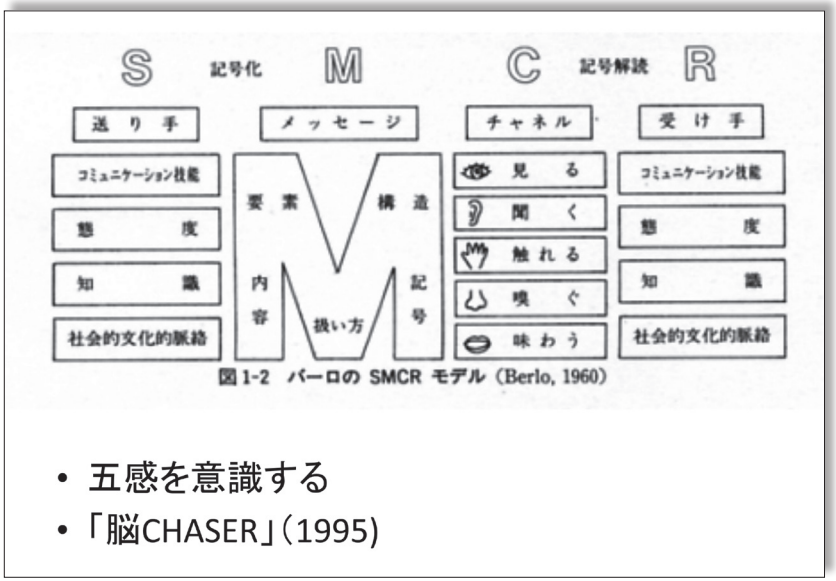
Hosei University Repository

す。

宮前さんが特に強調していたのは五感だけでなく、「メディアと表現実習」の2回目の授業で実践した「表現」でしたね。その後、最後に会った時に私はこの本を渡されたんですね。『人間とコミュニケーション』[6]。その中に、この図（資料６）が入っていました。

私にこれを渡しながら、このページを開いて宮前さんが言うには、今後授業の中ではこれを再三に渡って学生たちに言ってくれ、ということだったんですね。私はこれを見せられて「はあ」という感じで当時は見ていたのですが、今はとてもよく納得できるんです。

それぞれの送り手、受け手というのは、個別の人々それぞれが送り手、受け手であり、自分の中で何かを記号化して相手にメッセージを何らかのチャネル、感覚、メディア、そういったものについて相手に送って、それがどんどんフィードバックされていく。自分の中でも、送り手、受け手があってそれがフィードバックされて、ぐるぐると循



資料４

Hosei University Repository

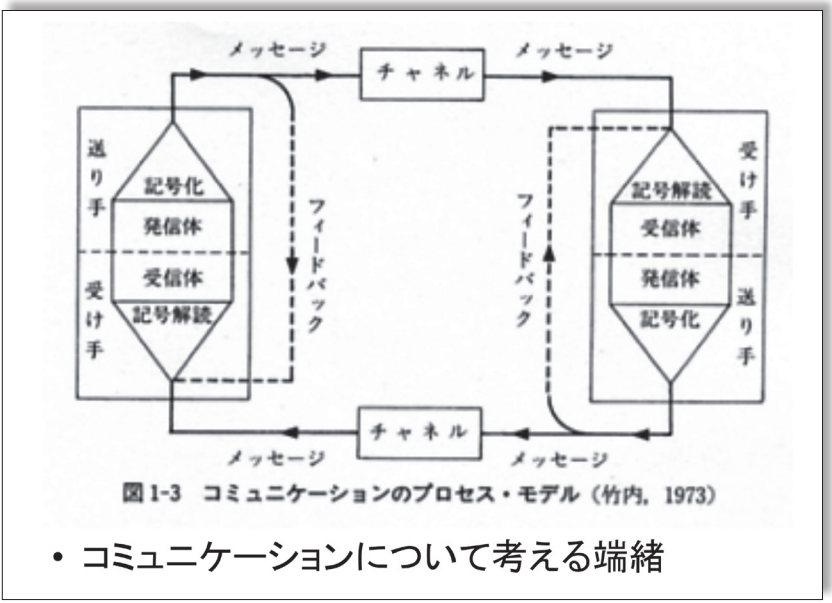
最初の問題に戻ろう。翌朝には風景が一変するようなこの東京は、どこか人の感覚を麻痺させる。一体何が原因なのか。それを俺は新しい五感の地図で確かめたい。俺は今も東京にwho are you?と訊ね続ける。

誰もがうすうす感じているはずだ。何気なく接している東京が自分の心理と感覚を少しずつ変えていることを。だが東京は変わっていく。自分の心理と感覚について考えるチャンスを与えない。その代わりに延々と続く変化を通じてメッセージを与えるだけだ。問題の一つは、速度だ。何かに行き詰まったらリセットボタンを押す。それまでのことはなかったことに。都合が悪ければ塗りつぶす。東京が人の意識と心理にもたらす影響を、このメディアスーツを着て隅から隅まで調査し、それを地図にすること。それが俺の今の仕事だ。俺が夜勤をするのはメデイアスーツに必要な高圧電源が欲しいからで。あの日会って以来、あの女と俺はいいコンビ。俺がメディアスーツで集めたデータをあいつが地図にする。地図といっても国土地理院が出している地図とはわけが違う。東京と、東京で生きる意識の関係を、根底から変えてしまう地図だ。

どんな地図か知りたいなら付いてきな。東京が設計された訳を、誰も見たことのない東京の姿を見せてやる。お前の脳に東京の速度をたたきこんでやる。

資料５「脳CHASER」（1995）

Hosei University Repository



資料6　コミュニケーションのプロセス・モデル（竹内、1973）

環する。これは単に、あなたと私という二者間の関係ではなくて、複数の人間がこれに全部絡んでいてネットワークになっている、ということです。

その考えの時に、さっき異化効果って出てきましたけれど、それはフォルマリズムに使われる有名な用語で、何でもないものの中にちょっと変わった要素を持ち込むことでまた違う感覚をあらわにさせる手法のことを異化効果というのですが。そういうものを一緒に考えたロマン・ヤーコブソンという人がいて、その人のコミュニケーションモデルからも考えるべきこともあり、私にとってはとても重要な研究課題でしたから、宮前さんがこれにこだわったということを非常に嬉しく受けとめました。こういったことを念頭に置きながら、その後の「コミュニケーションと表現」の授業を進めていきました。

第1回の授業は「すいとんなべ」というものでした。これは1999年の夏に新宿の病院に入院されていた宮前さんを訪ねて話をした時に、

Hosei University Repository

資料７　すいとん（コミュニティと表現実習）

「どんな授業をやりましょうかね」とメモを取りながら、「なんかパンフラワーみたいにパンをごちゃごちゃいじりながら形を作って、最後にそれを食べられるのがいいよね」って言い出したんですね。「じゃ、宮前さん、うどんでも作りましょうか」と。私は料理が好きなので、うどんはよくこねるんですけど、「そっか。うどんか。うどんいいよね。でも、うどんだとうどんの形しかないもんね」「ああ、そうですね」「鈴木先生、じゃ、すいとんにしましょうよ」「ああ、すいとんならどんな形でも作れるし、面白いじゃないですか」「そうだよね、すいとんだったら、発酵させたりねかせる時間なくていいですね」「じゃ、それにしましょうか」「じゃあ、どうやったらいいのか分かんないので、後は任せます」「え、僕がやるんですか」と言ってですね、結局私が大筋を考えることになりました。

どうってことないですが、要するに、みんなでいろいろなものを一緒に作る、いろいろな形を一緒に作って、それを最終的にみんなで食べられる。何がどうってことじゃないけれど、その中にはコミュニケーションもあるし、体を使う、見る、聞く、触れる、食べる、食べて味覚を感じる。そんなところから入ってみました。

これ（資料7）は2002年の授業の様子ですけども、こんなふうにみんなで粉をこねながら実際にすいとんを作って、最後はみんなで食べるわけです。これがなかなかおいしいんです。初めて出会った新入生同士が一緒に何か作って食べるということで、この場で仲良くなっていく子たちもいるわけです。1回目にやる授業としては、お遊びですけどいいんじゃないかな。その後の「コミュニケーションと表現」の

Hosei University Repository

実習でも、これはずっと行われていました。

次に第2回の授業ですが、「ビリー・ジョエル」というのをやりました。紙に書いた字と行為。どんなのかというと、今、やりますね。

こうやって「ジョエル」って宮前さんが紙に書きましてね。これを（破く）「ビリー・ジョエル」。みんな、のけ反るわけです。私も授業でいきなり見せられたから、ええっと思ってね。それから今度は紙に「クリントン」と書きましてね、昔の大統領夫人（現在の国務長官）ですけど、これを（落とす）「ヒラリー・クリントン」。

これを実際、宮前さんがやってのけた後に言ったことが、「紙というメディア、言葉、行為、それを他者に見せることで他者に働きかけるという表現、それらすべてがマルチメディアなんだ」。マルチメディアって決して難しいことじゃないんだ。これだってマルチメディアだって言うんですね。私は、ああそうだなと思いましたね。確かにそうだ。

で、「さあ、みんな、いっしょに遊ぼうぜ。」と言ったかどうか記憶にないんですけど、ただ、同じようなことはいつも言っていた。宮前さんは、こうやって人を乗せて遊ばせるのがものすごく、むちゃくちゃ上手でした。私はそういうことできない性格なので、すごい人だなと正直思いました。学生たちはいろいろなことをやってくれました。何をやったかは記憶が定かじゃないのですが、みんなすごい乗っていましたよ。これが「ビリー・ジョエル」というやつです。私にとっては非常に衝撃的な授業でした。

この後いったいどうなるんだろう、と思っていたのですが、残念ながらこの2回目の授業の後、宮前さんは東京に戻られて、連休を挟んで5月13日に亡くなられました。それを聞いて私と藤木先生は、これからどうしようと暗澹とするんです。とにかく残された宮前さんの蔵書を私が結構たくさんいただいたのと、ちょっと残っていたメモ、皆さんのお手元にありますプリントの4枚目に「アートとコミュニケーション『あなたはだれですか？』」があると思います、これがたまた

Hosei University Repository

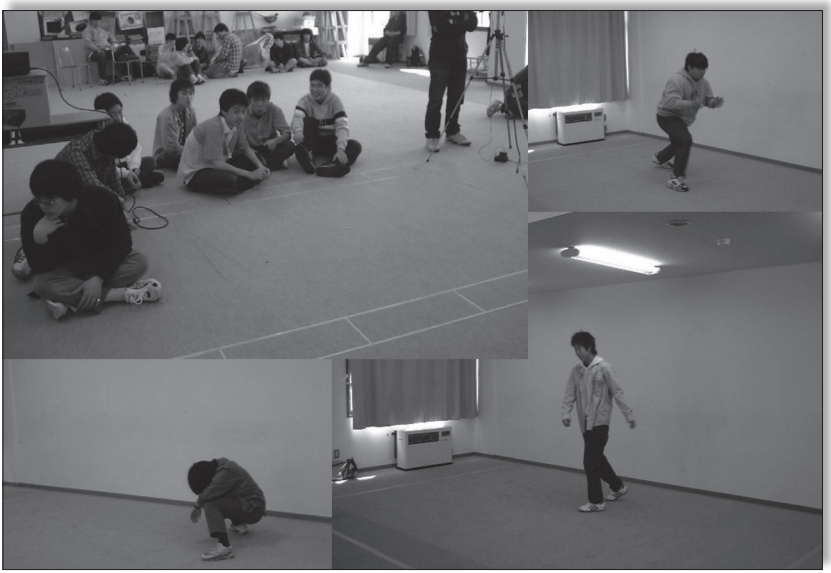
まあったんですが、これを読んだり、宮前さんの残した映像、それと「映像伝言ゲーム、キャッチボール、布のメッセージ」というメモだけがありました。これ以上何も書いてなかったのですが、「キャッチボール」だけは幸い、映像があったのでなんとなく想像ができた程度です。私たちがその想像を頼りにどうやって授業をやったかという話をしようと思います。

実際にやったカリキュラムについては資料の3枚目（資料2）の右側にあるように、全部で13回あります。記憶が曖昧なんですが、3回目の「散歩」というのは、ビデオカメラを持ち、みんなで学内や周りをちょっと散歩しながらビデオを映しつつ、話をしながら回るというような内容だったと思います。その次の「遊びの記憶発表会」というのは、これは藤木先生が主体になってやりました。自分が子供の時に使ったいろいろなおもちゃや物を持ってきて、それを机の上にわーっと並べて、みんなでそれを見ながら一つ一つに対して思い出を語り合う。他愛のないただの物なんだけども、話し始めると、そこにいろいろな記憶や記録があって、共通する情報がたくさんあるんですね。どうってことのない普通の物、それがうまか棒だったり、めんこだったり、おもちゃだったり、そういったものを頼りにみんながいろいろな記憶を共有したり喚起したりする。その物が重要なメディアであるってことを意識するわけです。その同じ時間を過ごして語り合うってことが大事なんだな、って思ってくれればいいのです。

そして次に「映像伝言ゲーム」。これは宮前さんのメモにあったものでした。要は、伝言ゲームを映像でやろうというものです。映像を通して見るということがどういうことなのか？　つまり私たちは普段テレビやなんかでいっぱい映像を見ていますけど、それを本当に意識して見ているのかということですね。じゃあ具体的にやってみようということで、どうするかというと――

（資料8参照）こういう、ある空間の中に線が引いてあって、その中の範囲で何でもいいからジェスチャーをしてもらいます。まず一つのテ

Hosei University Repository



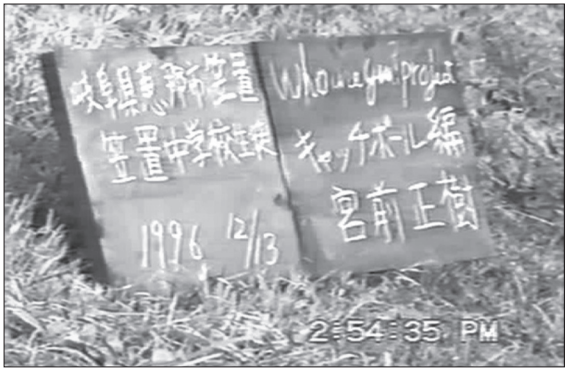
資料8　映像伝言ゲーム（コミュニケーションと表現実習）

ーマを決めたら、そのジェスチャーをする。一人一人がそのジェスチャーをするのですけれども、その様子をビデオカメラで映します。ただし、ジェスチャーをするグループは全員これが見えないところにいる。そして、ビデオで映している状況を次のジェスチャーをする人が、ついたての向こうで隠れてモニターを通して見ている。生で見ていなくて、あくまでもモニターの映像を通して前の人のジェスチャーを見て、それからどう考えるか分かんないけれど、同じようなジェスチャーをまた来てやる。で、次の人がまたそれを映像で、モニターを通して見ている。これを続けてやると、だんだんジェスチャーが変わっていくのが分かります。そうやって映像を通して見ている人の動きってものを真似しながら、では、そこで何を受けとめ、自分がどうまたそれをフィードバックしていくかということを体感することになります。映像というのはただ単に記録とか、そういうものじゃないってことが分かるわけです。そこに生身の人間もいるし、それをモニターを通して見るという行為も働くわけですけれども、それが障害物なの

Hosei University Repository

か、それがメディアなのか、いろいろなことを考えさせられるのですけれど、学生にはそんな面倒くさいことは言いません。

そして次に「キャッチボール」です。これも、どうしていいのかよく分からなかったのですけれど、最終的には「『言葉』を目に見えるボールに置き換え、全身で会話する」と考えました。こうした考えが分かる「それは美しい風景でした…。イメージの搾取、搾取するまなざし」という映像作品、番組を宮前さんが作っていますので、それを見てみましょう。岐阜県の中学校で宮前さんが生徒たちとキャッチボールしています。



（キャッチボールをしながら）
宮前「どうですが、統廃合されちゃうのは」
生徒「寂しい」
宮前「何で寂しいの。3年生でしょ。普通に、もう来なくなるからいいじゃん。だめ？　寂しい？」
生徒「はい」
宮前「何で？」
生徒「思い出がある」
宮前「いっぱい？　校舎がなくなっちゃうんでしょ」

資料9　それは美しい風景でした…。イメージの搾取、搾取するまなざし（1996）

Hosei University Repository

これの前に教室でインタビューするシーンがあるんですけど、その時はこの子たち、にこりともしない、全然ほほ笑まないんですね。ところがキャッチボールして始めると、とたんにみんなにこやかに会話が成り立つ。面白いなと思いましたね。

（キャッチボールをしながら）
宮前「キャッチボールなんて、したことある？」
生徒「はい」
宮前「けっこう、なごむ？」
生徒（頷く）

こんな感じです。たかがキャッチボール、されどキャッチボールでしたね。

宮前さん、いろいろなとこでキャッチボールされています。実際の授業では、体育館で軟らかいボール（こんにゃくボールですか？）をみんなで投げ合って、とにかく会話するということをやりました。結構みんな一生懸命ボールを投げ合うんですね、楽しそうにね。要するに、ボールという媒介物があって、言葉を交わし合う。たったボールが1個あるだけでこんなに笑顔が出てくるんだなって、とても驚きました。これもなかなか面白い実習だと思います。

そのほかに言葉の投げかけ方というのをやりました。人をこう、背を向けさせておいて、一人の人が後ろから誰かの、特定の人の背中に向かっておーいって声をかける。うまく言葉がその人に届くと自分の背中に言葉が当たる感覚が分かったりするんですね。これは竹内敏晴[7]さんの授業で有名で、演劇のワークショップなんかでやられています。

宮前さんのメモによりながら悪戦苦闘して実現した授業はこういったものでした。これ以外の授業は藤木先生と私の出したアイデアでしたので、簡単に説明します。

まず「目かくしオニ」というのをやりました。これは単に目かくし

Hosei University Repository

をして、ペアになって、相手に「こっちこっち」って声をかけて誘導する。それを何十組いっぺんにやるんですよ。相手に対して自分の声とか言葉を認識させないとペアの人が分からないですね。十組が入り乱れますから、うまく声をかけてあげないとぶつかっちゃうんですよ。相手への信頼感と、ちゃんと聞き取ることと、ちゃんと言葉を投げかけるってことをやらないと、うまくできない。ちょっと危ないんですけど、そういうのをやりました。あと、これは私が担当した声あてゲーム。5人ぐらい並べていろいろな声を出して、特定の人を当ててもらう。そんなこともやりました。

それから「秘密基地」作り。これはもう、誰でも分かると思います。ちょうと私が埼玉県から稚内に引っ越したばかりで段ボール箱が200箱以上あったんですね。本が大量にあったんです。この段ボール箱を使って何かやりましょうということで、藤木先生が「じゃあ、秘密基地作ろうよ」とおっしゃって、段ボール・ハウスを作ったんですね。そこで藤木先生は、ホームレスが作った段ボール・ハウスの例を見せて、「こうやって作るんだよ、ホームレスってすごいね」となるわけです。高価な材料を使わずにもできるし、アイディア次第でいくらでも面白くなる。5、6人のグループで、それぞれの秘密基地をデザインして作って、それをみんなに見せて、学生たちみんながお互いにそこでくつろぐのです。これはとても盛り上がりました。

それから「ソバヤ」ですけれども、これはタモリが昔やっていた。参加者全員で「ソバヤソバーヤ、ソバヤソバーヤ、ソバヤソバーヤ」これだけを単に繰り返すんですね、みんなで手をパンパンたたきながら。「ソバヤソバーヤ」って言った後、同じ小節を、間があいたところで即興で適当なことを言うんです。やったことあります？　やってみますね。「ソバヤソバーヤ、○△×☆○△×☆、ソバヤソバーヤ、ンバンバンバンバ、ソバヤソバーヤ、アイスクリームアイスクリームアイスクリーム」とか。その場で適当に言えばいいんです。ただ、うまく間に乗れないと、あああって感じになっちゃうんです。そんなこ

Hosei University Repository

ともやりましたよ。要するに、単に間合いの中でその場の思いつきでいいから何でも言ってみる。みんなが手をバチパチたたいて、ぐるぐる回っていくと、だんだん高揚感が漂ってきて、しまいに体がリズムに乗っていきます。だんだん盆踊り的な感覚になってきて、すごく熱狂的になります。そのほか、いろいろな音を意識する授業をやりました。いろいろな音が出る物を持ってきて音楽を作りなさい、なんてこともやりました。

それから、もう一つ宮前さんのメモにあった「布のメッセージ」。メモしかないからどうしていいか分かんない。布を実物投影機のとこに持っていき、みんなに見せながら適当な形を、自分がメッセージをここに入れたんだよってつもりで布の形を作って置いてみて、それを人に見せる。で、何が言いたいの、ってことを当て合う。今度は二人一組になって、この布を持って会話をする。これみんな、ほとんど禅問答のようでしたけどね。でも結構一生懸命みんなやっていました。難しいとか言いながら、だんだん回数を重ねていくうちに、みんな話が通じるようになっていくというのが、かなり不思議でしたね、これは、よかったら皆さんも今度やってみてください。

それから「段ボール劇場」。これは藤木先生の担当した授業です。段ボールを使った小劇場作り、およそ1分間ほどのミニドラマを作って、それを最後にみんなで見ます。具体的にはこんな（資料10）感じです。

要するに、余っていた段ボールを使って、中を劇場にするんですね。顔だけで表現して、この顔の部分だけをビデオに撮るわけです。で、最終的にはいろいろなお芝居ができるんですが、こうやって作った劇場作品、1分間か2分間か演じたものがビデオになる。そのビデオ作品をまたみんなで見て、あはははは と笑うんですけれど。作っている現場をみんな見ているから、実際最終的にできた映像だけを見るのと全然感覚が違うんですね。映像作品を作るいろいろな段階で、こうやっていろいろな物が関わって、人が関わっているということが分かる。

Hosei University Repository

資料10　段ボール劇場（コミュニケーションと表現実習）

これはとてもとても楽しい授業でした。

それから最後の受容では、みんなでフリップブックを作りました。いわゆるパラパラ漫画です。これによって、これからパソコンで何かやるであろう、コンピューターを使って映像を作るであろう学生たちに映像の基礎を知ってもらえたと思います。

試行錯誤の繰り返しでしたが、、この「コミュニケーションと表現実習」というのは、自分の身体と五感をどう意識するか、それをやったのだと私は思っています。自分の中にあって、よく分からない、いろいろなどろどろしたものを実現するためにどうしたらいいんだろうと、みんな考えていますよね。それを実現するためのとっかかりがうまく作れればいいのかなという感じでした。それから、自分の行為が成り立つためには必ずほかの人が必要なんだということを分かってもらう。徹底的にアナログなことをやりつつ、じゃ、今、さまざまな技術やメディアがある中で、それをどうやって使って、さらに自分の身体を拡張したものにしていくのかということに入っていくための前段階の授業ととらえていた。

もうひとつ、この実習は私の「コミュニケーションと表現」という

Hosei University Repository

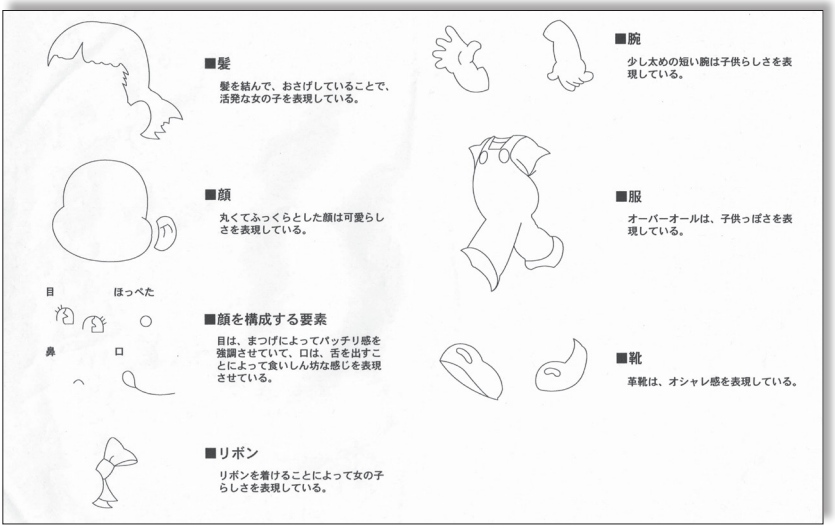
講義とゆるやかに連携していました。その内容については特に言いません。私の講義のほうは、この世界と自分はどう関わっているのかという、いろいろな見方を学生に提示することであって、理論とか理屈は一切なしでした。とにかく世界は面白いよ、ということを語り続ける講義でした。その講義を受けた子が実際に身体を動かしてどう感じたかというのは、またそれぞれだと思います。

で、どう考えればいいのかな。とても悩ましかったです。とにかく、この実習はまったく初めてやることだったので、毎回おたおたしていました。準備するだけで大変でした。すいとんの用意なんて、めちゃくちゃ大変なんですよ。ましてや宮前さんもいないですしね。藤木先生と毎回うーんうーんって言いながら、やるたびにへとへとになって。学生たちにしてもまったく初めてやることだし、私たちにしても学生がどう反応するのかってまったく分からないのですから、ほとんど学生と同じような立場にいたのだと思います。学生を通して自分たちが教えてもらっている、という感じでした。この実習で、自分が何か教えているって感覚でやっちゃうと絶対うまくいかなかったろうなって思います。一緒に楽しんでやっていました。本当に楽しかったです。こんな授業は、もう一生できないだろうと思います。やれるものなら宮前さんと全部やりたかったですね。きっともっと違う世界が開かれたと思います。ただ、このことがきっかけで私の授業のやり方とか、考え方とか、完全に変わってしまいました。今も大学でロシア文学なんかを教えていますが、いくつかの授業ではワークショップ的なことをやっています。

最後に、宮前先生担当の授業がもう一つあったんですが、それを代わってやったのが藤木先生で、ロゴのデザインをやっていました。宮前先生が専門学校時代にやっていた授業のらしいです。その教材の一つで、これはペコちゃんです。

ペコちゃんを分解して、それぞれどんな記号的特徴があるかというのを探し出します。その記号的特徴を見ていくうちに、どうしてペコ

Hosei University Repository



資料11

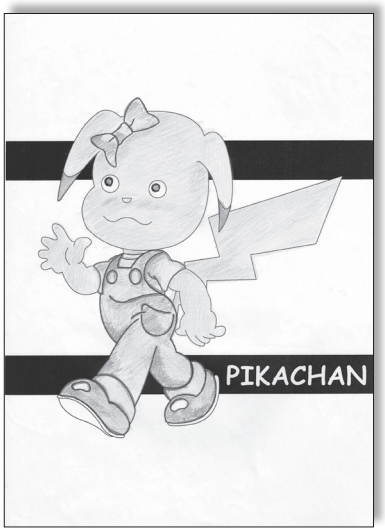
ちゃんはこんなに人気があるのかって分かっていくわけです。ピカチュウの記号分析もあります。こういうキャラクターデザインをしている人たちは、すぐ分かるんですけれども、ペコちゃんとピカチュウを分析して、それぞれの素材が分かっていくと、二つ合わせたものを作れる。要するに、かわいいキャラクターを自分で作れる。たとえばペコチュウ（資料12）。それからピカチャン（資料13）。

宮前さんが実際どういう授業をしていたか私たちには分かりません。おそらく、新しくロゴマークを作る授業にあたっては、こういういろいろな要素を分析することで新たなロゴマークを作るようなことを藤木先生はされていたんじゃないかと思います。私が担当したのは、このロゴマークのプロデュースにあたっての企画書の制作、企画書の書き方を手伝いました。あとはコーポレートアイデンティティ（ＣＩ）の考え方とかですね。あまり私は役に立ってないんですけど。

とにかく、宮前さんの考えていたほんの一端にしか私は触れていなかったと思います。それだけでも宮前さんは偉大な方だったんだな、もっと話をしておけばよかったとつくづく思います。また細かいこと

Hosei University Repository

資料12



資料13

などはいろいろ思い出したら皆さんにお話しできればと思います。こんな世界があったんだということを知っていただければ幸いです。どうもご清聴ありがとうございました。

稲垣　鈴木先生、ありがとうございました。ちょうどそのころの授業のこと、藤木先生と鈴木先生と私と3人で「メディアと表現」という分野の取り組みに関して、特に中心的な実習の考え方についてテキスト[8]にしたこともありますのでよろしかったらご覧下さい。鈴木先生と一緒に授業もしていたので私には非常に懐かしく感じました。

　大榎さん、では、よろしくお願いします。

大榎淳（メディアアーティスト・東京経済大学コミュニケーション学部准教授　以下大榎）

僕は宮前さんと最初に会った時のことをはっきり覚えていて、1988年に「第２回神奈川アートアニュアル」というのが神奈川県民ホールギャラリーで開催されて、その時に同じ大学の友人で津田佳紀という作家がいて、彼に搬入を手伝ってくれって言われて一緒に行ったんです。

Hosei University Repository

神奈川県民ホールのギャラリーというのが、2階から入って下りていくような構造になっていて、階段を下りる前の所に津田君の作品を置くという約束ができていたらしいんですよ。で、宮前さんの作品というのが、もともと宮前さんというのは日本画の画家なんですね、結構大きいんですよ。日本画なんだけどキャンバスに描いていて、そういう作品がドーンと大きく正面に階段から下りていくと見える、みたいな場所に設置しようと彼は思ったみたいで。その前の所に僕の友人の作品を置いていたんですね。そしたら「君たち、ここに作品を置いたらね、どうなるか分かる？」というわけ。要は、奥の僕の作品が目立たないって。いろいろな言い方するんだけど、要は自分の作品が目立つためにはここに君の作品があっては困るみたいなことを僕の友人に言って。それが最初だったんですけどね。ある意味なれなれしく話しかけてきたんです。津田君とそれ以前に打ち合わせやなんかで顔を合わせたり話していたのかな、なんて思ったんですけど、どうも彼もその時が初めて会ったという話をしていました。

それがあって以降、僕の同じ大学の友人で久保田信一という作家がいて、今、なぜか陶芸作家になっているんですけれども、彼がまた別の所で宮前さんに会って、それは小田急線柿生駅からかなり離れた所で、みんなで「トリゴヤ」って言っていたんですけれども、大きいビニールハウスみたいな、ほったて小屋みたいな所を共同でアトリエとして借りていたんですね。その中に宮前さんがいたんです。彫刻の池ヶ谷肇さんとか、共同でそのスペースを維持していて、そこにちょっと客分として出入りしたのが久保田君だったんです。「宮前さんって人はこういう人だよ」ってことは、彼から伝聞としては聞いていた。

彼はもう80年代の真ん中ぐらいから、日本画の作品で急速に現代美術の有名人になっていったと思うんですね。具体的にどういうことをしていたのかというのが分からないんですけども、そのころ、80年代の初めか真ん中くらいの時に、宮前さんや池ヶ谷さんという、急激に知名度を増していく現代美術の作家たちが、その「トリゴヤ」の中で

Hosei University Repository

いかに自分たちを売り込んでいくかということに必死になってやっていて。美術の人たちがポートフォリオをまとめて、恰好よくして、それをいろいろなキュレーターに売りこんでいったり、画商に売りこんでいったりする活動を、今や当たり前なんですけど、そういうことをいち早くやった。ある意味、現代美術を広告代理店的視点で自ら売りこむみたいなことをその当時やっていたんですね。そういう活動の中で、88年というのは「神奈川アートアニュアル」に出て、その後山口県立美術館であるとかですね、このあたりからブレイクする感じの時期だったですね。

それはまさに、要するに日本のバブルとちょうどシンクロしているわけです。で、90年前後にいろいろな展覧会に呼ばれていって。そのころ僕は、87、88年くらいに大学出てパフォーマンスアートとかやっていたんですね。だから宮前さんみたいに、いわゆる作家、いかにも現代美術みたいな文脈で出ている人は「何だあれ？」みたいな感じでは見ていたんです。ただ、宮前さんはやはり日本画って文脈の中から出てきた人なんで、やっぱり日本画家としてもうちょっと語る人がいてほしいなという気はしているんですね。

で、そういうことがあったんですけど、やっぱりバブル崩壊とともに仕事がこなくなってくる、という状況が93年あたりから出てくるんですね。93年に「横浜・サンディエゴ交換現代美術展」（サンディエゴ）というのをやったりね。これも「横浜･サンディエゴ交換美術展」なんだけど、サンディエゴに行きたいから、無理やり何かキュレーターにねじこんで僕も一員にさしてくれ、みたいなことをやったんじゃないかなと思うんですけどね。それから94年に「マレーシアン・エクスペリエンス」（マレーシア国立美術館）というのが、これは美術館って書いてあるんですけど、彼から僕、聞いたのは、マレーシアに、ASEANだったかな、何カ国かのアーティスト、それからオーストラリア、太平洋沿岸のアーティストを集めて共同作業をさせる、みたいなことで、ジャングルの中でキャンプしたんだ、みたいな話を聞かさ

Hosei University Repository

れたんですね。で、やっぱりネイティブなことをあまり知らないオーストラリアかどこかのアーティストが池を見つけて急に飛びこんだら体中にヒルがくっついてきゃあきゃあ言っていた、とかですね、そういう話を聞いたんですけれど。それから、やはり94年「今東方の夢 韓国・日本・中国国際交流展」(首都師範大学、北京)。これも北京に行って、この当時まではまだ現代美術がアンダーグラウンドなものだったらしくて、特に北京というのは政治的に厳しいですからね、なのでビルの中の一室がアトリエになっていて、そこでトントンとノックして合言葉を言って鍵開ける、みたいな雰囲気。ま、そこまではないでしょうね。そういう中でアーティストが作品を自分のスタジオで見せていくというような現場を回ってきたというのを結構面白がって話してくれたように思います。ちょうどバブルの崩壊があって、いわゆる日本画家としての仕事が何か難しくなってきたころに、まさに宮前さん自身がワークショップ的な展覧会というのかな、国際交流という中で作家が集まって共同作業したり討論したりするという企画を体験してきたんじゃないかな、というふうに思うんですね。

で、94年「IZUMIWAKU Project[9]」(杉並区立和泉中学校)。これは僕も参加したんですけども。僕はなかなか宮前さんのワークショップって見てないんだけど、ここでまさに宮前さんのワークショップを見たんですね。中学生に対して、これはビデオが残っているんですけども、自転車の前にビデオカメラをくっつけて街の中を走らせてみたりとかですね、そういうことをやったことがあって。僕はその時は中学校でミニＦＭをやろうって言って、送信機作ってラジオでみんな喋る、みたいな。その時、中学校の屋上にアンテナを出してくれたんで、すごい調子よく何キロも電波が飛んでＰＴＡから「みんな聞こえてます」とかって。かなり違法な電波だったと思うんですけども、そういうのをやっていました。

ちょうど今、仙台に村上タカシというアーティストがいるんですけれども、彼が美術の先生をやっていて、その自分の勤めている中学校

Hosei University Repository

で美術展をやる、かなり画期的な企画だったんですけども、彼の笑顔でPTAはみんなころっといって展覧会が実現したというですね。ひと夏かなり、僕も宮前さんも通って、勝手にプールで泳いだりとかですね、途中、校長先生に怒られましたけれども、ま、かなり中学校に関わって作品作っていくということを、僕も体験したんですけども、宮前さんも体験したんですね。だからこの沿革を見ていくと、94年というのはかなり大きかったかなという気がしています。

で、実はこの後にですね、彼のワークショップとしては彼自身もすごく自慢をしていた千葉県佐倉の美術館でのワークショップ[10]等々の仕事があるんですよね。まあ、バブル以降に彼がいろいろな意味で活動の場を見つける変遷の中で今日、先に鈴木さんに見せていただいたような活動というのがいっぱい出てきたのかなというふうに僕は思います。

ただ、彼はずっと多摩美の日本画コースに行ったということもあって、例えば市民講座で日本画の先生をやっていたりとか。日本画ってそういうシステムがあってですね、弟子にちゃんと飯食わすために日本画の講師の職をあちこち配置したりとかですね、そういうのがあるみたいなんですけども、その一環で、あれは玉川の高島屋かな、日本画の先生をやっていたりとかですね。あと、美術教師の免許持っていたんでしょうね、高校で非常勤の講師をやっていたりとかして、そういう意味では高校の教育であるとか、そういうところの問題点みたいなことを、ずっと話を聞かされたような記憶があります。だから、すごくある意味、教育ってことに関してついついまじめになっちゃうようなタイプの人だったんじゃないかと思うんですね。

これも飯のタネなんですけれども、専門学校の先生をやっていて、その中で教務的な仕事をやっていて、カリキュラムを組むとか、相当ある意味、そこで仕事を根詰めてやってしまったみたいなところがあって、それが原因というふうにも言い切れないですけど、その中で肺がんが見つかって、2000年に亡くなったというようなことになってし

Hosei University Repository

まって。

僕自身は、だから個人的には、もうちょっと画家としても宮前正樹というのを語ってあげたいなと思うんですけども、恐らくその90年以降のワークショップの活動というのは、うまく活動できないんだけど、そこをどうやっていくかということと、情勢として展覧会自体ワークショップ的なものが企画されていくとかですね。そういうところで彼がいくつか学んできた事柄があって、90年代後半にワークショップみたいなことをいっぱい実施することになったんじゃないかなと思います。

ま、このくらいしか語れないんですけどね。むしろ、どう考えていいのか。「宮前正樹とworkshop」ということで僕が問いたい、という感じで今日は来たんですけども、どうでしょう。

稲垣　そうですね、やっぱり日本画を描いていたところからワークショップにスイッチしていったのは、宮前さんの意志というより、世の中がそういう流れになっていく中で宮前さんが関わっていったということはあると思うんですよね。ただそこにもやっぱり宮前さんなりのアプローチというのがあったとは思うんですけれども、それが稚内につながっていくのかな。

大榎　あの、僕はもうずっと下流なアーティストなんで、ずっと食うに困っていたんですけど、宮前さんはそういう意味じゃ 80年代の現代美術のスターになっていく。それが90年前後まで続いていくわけですが、やっぱり92、93年過ぎたあたりから、結構、生活に困ったみたいな展開があって。わりとそのあたりから僕も個人的に付き合うようになったんですけれども。その前は、一緒に美術展やるとだいたいオープニングパーティやって、そこから流れていって飲んでるみたいな世界があるんですけど、あんまり僕はそういうのはなじめなくって。僕の友人たちで、さっき言った津田君であるとか、僕の周りの人が一緒によく遊び回っていたんじゃないかと記憶しているんですけれども。

Hosei University Repository

その後ですよね、93年、94年あたりからわりと仕事が変わってきた。世界の動きがちょっと変わってきた時から、僕はたまたま近所に住んでいたってこともあって、よく付き合うようになって。仕事をシェアしてね、バイトをやるみたいなね。医学書の図をトレースしてフォトショップで納品するみたいな。僕の共通の知り合いにデザイナーがいたんで、そこから仕事もらって、君に10個、僕5個みたいな、そういう仕事をしていたように思います。

その中で、なんとか食いつながなきゃいけないってことで、何をやれば俺たち飯が食えるんだってとこから、あんまりこういうとこで喋るとよくないでしょうけど、「大学の先生になろう」というのを宮前さんと僕は話していたんです。その時には、さっき言った津田君だとかもうすでに大学の先生になっていた。「あれで先生になれるんだったら俺たちもできるよ」って、相当ひどい会話をして。どうしたらなれるかという時に、今の業績は変えようがないからね、しょうがないんですけれども、いかにそれをすてきに見せるか、またそれが始まったわけです。たぶん80年代にそういうことを考えたんでしょうけれども、採用される企画書、ポートフォリオの作り方みたいなね。聞きたいでしょ、みんな。そういうことを言い出して、二人で書いていたんですね。で、その時に僕も稚内の公募を見て「ジャストじゃん。学歴はそんな問うてないぞ」ってね。彼は一応、修士いってたのかな、僕は学部しか出てないしこれはないなと思ったんですけど。稚内は旅行したことがあって、それも冬に。「いやあ、あれはちょっと、かなあ」みたいな、個人的にちょっと思って出さなかったんですよ。そうしたら宮前さんから「いや、俺あれ出したよ」って言い出して。「うーん、そうか。でも宮前さん冬行ったことないでしょ」「いやあ、行ったことないよね」ということは言っていました。

で、それがうまく通って「北海道行くことになったんだ」。そのすぐ後かな、病院から電話がかかってきて、「俺、肺がんらしいんだよね。死んじゃうらしいんだ」みたいなことを言われて。夜、電話がか

Hosei University Repository

かってきたんですけどね。「えー、なにまた言い出したんだ、この人は」みたいな。そういうような話があって、そこから1年くらいだったかな、ってことを思い出します。

その前にもね、ここには書いてないんですけど、「ファミリーオンネットワーク」(川崎市民ミュージアム)[11] という僕も一緒に参加していたんですけど、僕が天皇家の写真使ったら右翼から脅迫状がきて、これは富士ゼロックスと川崎市民ミュージアムが主催だったんですけれど、富士ゼロックスの人が怖いからって、それ出すのやめてって作品を隠した事件があって。それ検閲じゃんって話になって結構もめたんです。結局それは公開選挙なんかしたんですけれど、これは市じゃなくて、市民ミュージアムという独立した法人なんで門前払いだったという経緯があって。その復讐に95年にみんなで市民ミュージアムに押し掛けて抗議しようという話になって、単に抗議じゃ面白くないから、さっき言ったラジオの送信機作れるから、みんなでラジオやろうって言って。それを宮前さんと一緒にやって、市民ミュージアムをちょっといじめるイベントをやったりしました。

それから94年、たぶんこの年だと思うんですけど、ちょうど今の天皇が初めてアメリカに行く時に反対派がいっぱいいるわけですけれども、その天皇制に反対しているグループと一緒に行動して。反対派は空港入れないんですけれど、そんな反対派ってゼッケン付けずに宮前さんと二人でビデオカメラを持って空港に入ってビデオ撮ってくるということをやりました。その時に、宮前さんが被写体で僕がカメラマンという設定で、宮前さんが、例えば警備のおまわりさんに声かけて、「僕は右翼で、ぜひ天皇陛下にお会いしたい」とか言ってそこに行こうとすると、おまわりさんみんなから笑い者にされる、みたいなシーンをビデオに撮った作品があります。二人でやった代表作はそれかなあ。その後もいろいろ再編集して使わしてもらっているんですけれど。ちょうど94年くらいが、そのあたり。

で、すごく、93年、94年ごろの時期が転換期というのかな。宮前さ

Hosei University Repository

んにとっても転換期だったし、僕もある意味この時期というのが変化してきた時期。それは、一つは時代というのは大きかったというふうに思います。

だからこの市民ミュージアムも結局僕らが嫌われ者になったんですけれども、ちょうど企画をやっている時にはね、このころかな、学校が週休二日になったりするというのがあたったりとかね、じゃあ例えば生涯教育や子供の教育みたいなことでも、例えば美術みたいなものが何かできるんじゃないか。半分、仕事作ろう、みたいな悪い気持ちがあって、でも半分そういうことでいろいろなことができるんじゃないかって宮前さんも僕も話していた時期だったというふうに思います。

稲垣　宮前さんの息子さんにも何か。

大榎　ああ、そうですね。男の子が一人ですね、すごく子煩悩な人だったんですけれども。彼のご両親の出身というのが秩父で、そこに家があって、宮前さんのお父さんがもともと日本画をやってる方なんですよね。それで日本画やっていたのかな、なんてちょっと思ったりもするんですけど。そこに家があって、何家族か、僕以外も子供のいる家族と一緒に、夏ですけれどね、宿泊したことがあるんですね。その時に「こうやってさ、子供のいる家族が集まってなんかやるというれしいよね」みたいな、そんなこと言うかなって感じで語ってましたね。すごく印象に残っています。

今、知っている人に確認したんですけど、「キャッチボール」の作品やり始めたころって、離婚しちゃって子供に会えなくなったころじゃないかなって。

会場の女性　一緒に住んでいたんじゃないですか？

大榎　その後、別になっちゃったんで。だから、あれかな、その後か。

会場の女性　そうそうそう。

大榎　複雑なんだよな。なんかね、ちょっとそのへんを思ったんですけどね。そのころはまだ一緒に住んでいたころか。ちょっとずれてい

Hosei University Repository

ましたね。

だから教育って意味じゃ、高校のいろいろな局面で、わりと非常勤をいっぱい入れるような所なんで、だいたいなんかね、結構きついようなとこだったと思うんですけれども、そういうところでの現場とか、結構話してくれました。

あと、彼は多摩美なんだけど、僕が和光大学というどうしようもない大学の卒業生なんですけれども、そこの僕の後輩たちをなぜか、地理的に近いってこともあったんですけど、アトリエとか家がね、そこの学生たちを自分のアトリエで作業させたり、子分みたいに使ったりということをしていたんですよね、ずっとね。誰かに教えるみたいなことに関しては、すごくやりがいを感じたんじゃんないかなと思っています。そんなとこですかね、僕が言えるのはね。

稲垣　鈴木先生、何か大榎さんに聞きたいことはありませんか。

鈴木　実際、高校や専門学校で教えてらしたってことなんですけれども、そういった子たちは今どうしてるのかなって。どんな先生だったのかなって知りたいですけどねえ。

大榎　僕も、教えていたところは見てないので分かんないですね。でも高校の美術の先生って、だいたいほら、美術室って保健室の次に逃げ込む場所だったりするので、だいたいそういう想像しているんですけどね。

鈴木　私もよく逃げ込む方でした。

大榎　今、ずっといつも美術室にいらっしゃる美術の先生っていないのかもしれませんよね。宮前さんのころから、彼もそういう話を言い出したんですけど、一つの学校に非常勤で行っても美術の先生がいつもいるんじゃなくて、一日のうちで移動しなきゃいけなかったりだとか、何曜日はこの学校、何曜日はこの学校みたいな感じで美術の指導をしなきゃいけないという状況も、彼は語ってくれた。

稲垣　何かおふたりにご質問といいますか、また宮前さんのことをご

Hosei University Repository

存知の方で補足みたいなことがあればないでしょうか。せっかくの機会ですからね。

学生　授業内容を3人で考えて、宮前さんの残したメモをもとに授業をされていく中で、分からない内容が結構あって、それを自分たちでメモを頼りに進めたっておっしゃったんですが、話を聞いていた印象で、宮前さんが中心になっていたのかという印象を受けて。例えば「ビリー・ジョエル」の話の時に、人を乗せて遊ばせるのが得意であった、とおっしゃっていましたけれど。どうして宮前さんが亡くなられた時に、メモを頼りにやると大変だから自分たちだけでやっちゃおうと思わなかったのかなって。

鈴木　中心というか、私はおまけみたいな感じですね。藤木先生が一番年上でいらしたので、藤木先生自身がいろいろなワークショップに取り組んでおられましたから。私の参加時点で藤木先生と宮前さんがとても仲よくて、僕はどうしたらいいかなって感じがあったんですが。ただ、宮前さんががんで余命いくばくもないことを知らされていましたから、宮前さんの意向を大事にしていきたいという感じでやっていました。藤木先生もそんな感じですね。私はおふたりに付いていきますという感じで。

で、「ビリー・ジョエル」については、わりと早めに聞いていたと思います。こんなことをやりたいんだって。それから「映像伝言ゲーム」については、藤木先生とたぶん話をされていたんだと。これはわりあい違和感なく、すんなりいった。あと紙芝居の話もしていたんですよ。紙芝居、実際何されていたかは知らないですけれども、紙芝居の本も私いただいていて、これやりたいんだよねーみたいなことを言っていたんですけれども、具体的には何も。「キャッチボール」はすでに話を聞いていて、これだったら面白そうですねって。これ僕絶対やりたいんだって宮前さんおっしゃっていたんで、それはやりましょうって。で、よく分かんなかったなりにやっちゃったというところがあります。「伝言メッセージ」これはまったく分かんなかったですね。

Hosei University Repository

記憶にないんですよ、これ。

あと、この全体を組み立てて1年のメモを作って、できちゃった段階で、これは宮前さんからもらった宿題だと思ってやっていましたけれども。その後は、次回からはこれがどんどん崩れていって、自分たちなりに変わって、稲垣先生がいらしたころにはだいぶ違うものになっていたんですけれども。

本当に、初回はまったく何がなんだか分かんなかったという、現実です。亡くなった宮前さんの意向に沿いたいという、今でもこれは3人でやったという思いでいます。

大榎　このね、以前メールでも書いたんですけど、ワークショップというのを稲垣さんはどういうふうにとらえていらっしゃるのか。文脈からいうと、授業というのをちょっと意識していたんですけど、ただ授業じゃないでしょという。それをどう考えていらっしゃるのかなって。

稲垣　そうですね、僕自身がこういう枠組がワークショップだということを定義するまでもなく、つまりは絵にかいた餅ではないようなことを扱う場合に、絵にかいた餅じゃないようなことをどうやって説明していくかって時に持ち出す。ワークショップをやろうというのは、たぶんそんなことが多いと思います。授業のように先生がいて教わる人がいてという関係じゃないところでの関係で、何かお祭りのようなというか、みんなで集まってその活動を支える中でだんだん伝わっていったりとか。そういうようなことが現代風に言うとワークショップという言葉になっていくのかなって。だから美術工芸の世界だと徒弟制度で上から教えるという部分もあるんですけれども、現代美術の場合、近年は『関係性』ということがキーワードになっていて、作っている側と見る側との関係が変わってきている。その関係を言葉にすると、90年代頃からワークショップって言葉がうまい具合に使われているんじゃないかって。

Hosei University Repository

大榎　「宮前正樹とworkshop」という場合は、どのへんに。

稲垣　「宮前正樹とworkshop」という場合は、宮前さんの活動というのは、私には鈴木先生や大榎さんみたいに詳しくは分からないのですが、ただ、よくワークショップをやっていたなという印象が僕の中にあるんですね。その前には、日本画の画家としての存在が知られていて、ある時期からワークショップという枠の中で宮前正樹が語られ始め、そのスイッチって僕の中では興味があって。というのも僕自身にも同じような時期に同じようなことが起こっている。宮前正樹の変化のスイッチを、キーワードとしてつなぐ場合にワークショップというのがいいのではないかな、と思ったんですよね。なかなかそれに代わるような言葉がなくて。いろいろ考えてみても、やっぱりそれはワークショップなのかなあと。特に教育の現場にあっては、宮前さんは一般的な学校や高校生、子供たちという関係の中で何かを作っていくようなことを実践してきたような認識がある。

　で、今回ワークショップということにしたのはですね、ちょうど大榎さんが宮前さんと関わっていくタイミングと、稚内の鈴木先生と宮前さんがカリキュラムを一緒に組んでいたというようなことがつなげられるのかなという気がしたんですけどね。一番直接的な理由は、大榎さんが書いた追悼文[12]の中に、ワークショップという記述があったんですけどね。

大榎　宮前さんと最初に会ったころに出会った村田早苗[13]さんが会場にいるんですけど。

村田早苗　私も、92年の「"Who Are you?"」がたぶん分岐点だったんだろうと思います。私も含めていろんな人に「私は誰ですか」っていう質問書がきて、「私」だと思うものと一緒に送り返してくれ、と。その後「答えはだいたい3パターンあって…」と、話を長々と聞かされました。宮前さんは会うといつも弾丸のようにいろんな話をして、私は結構うんうんと聞くものですから、美術関係者には言えないようなことをへたすると夜っぴいて…みたいなことがありました。すごい

Hosei University Repository

読書家だし、物知りだし、私はもう本当に尊敬していました。私のキャリアの中で美術の仕事が一番長くなったのは、彼に会ったからだと思っています。

お子さんが生まれたのは90年ぐらいですよね。95年の2月だったと思うんですけど、宮前さんに「カニの山があるから食べにこない？」って電話したら、息子さんを連れてきました。その時初めて宮前正樹と息子の関係を生(なま)で見たんですけど、真剣に遊んでたんですよ、息子さんと。で、真剣にやりすぎたために息子がへそ曲げたんですね。私たちが一生懸命なだめても全然だめ。宮前さんが息子の機嫌を直すために真剣に「ひとり足じゃんけん」をやりだした。しばらくすると息子が、それに同調するように、一緒にやり始めたんです。

それから、うちにあったポラロイドで息子さんがパシャパシャ撮って遊び始めたんですが、印画紙が古いのできれいに感光しない。そのいろいろ崩れているのを一枚一枚、息子さんが組み合わせるように並べ始め、それを宮前さんが隣で見ていて、息子は父親を確認しながら続ける。その時に、宮前さんは息子にいつもいろんな話をし、遊びを通じていろんなこと教えているんじゃないだろうか、と思ったんです。

亡くなってから、彼から聞かされたことをいろいろ思い出した時、もしかしたら自分がアーティストだってことを言うために、息子さんが生まれてから後の活動っていうのがあったのかなと思いました。「"Who Are you?"」がワークショップになってからは特に。確かワークショップにはいつも息子を連れて行っていたと思うんですけど、息子さんに自分はアーティストだってことを示すためにワークショップをやっていたのかなって。

亡くなる半年前に電話をしたら、宮前さんが「なぜ自分はこうなったか？」切々と話してくれました。私は「宮前さん、ワークショップの仕事をまとめようよ。宮前さんのワークショップは＜作品＞でしょ」と切り出しました。「もう目が見えないからできないよ」って言われたんですけど、「趣意書さえあればいいよ。あとはビデオ・インスタ

Hosei University Repository

レーションを大榎さんたちに組んでもらえばいいじゃない」って言ったら、「そうだよな」と。

今でも胸が締め付けられるように痛くなるのですが、「ワークショップの話が美術館からくるのはうれしかったけど、食えないから悲しかった」って言われたんです。美術館に所属していたことがある私にとって、すごく重い発言でした。私は、人に問答をしかけてキャッチボールさせる宮前正樹こそが一番「売れる」、だからワークショップは作品として評価されると思っていました。でも、ワークショップやっても、考えたり準備するのに時間を費やす割に食えないじゃないか、と。忸怩たる思いを抱えていたんですね。

漫画家のしりあがり寿[14]さん、彼は宮前さんと多摩美で同級生だったそうですね。「宮前がいたから、俺は画家になるのをやめた」っておっしゃっていたのを聞いたことがあります。宮前さん自身は「俺、才能ないでしょ？」と、しょっちゅう言っていたんですよ。ものすごく劣等感が強かった。「そんなことないよ。いろんなこと知ってるし、本もいっぱい読んでるし」と私が言い返すと、「頭悪いからでしょ？」と。息子さんについても「頭悪かったらどうしよう？」って心配してましたね。後で人づてに、とても教育熱心で、いろいろ工夫して息子さんに勉強を教えていたと聞きました。

お葬式に行ったら本当にいっぱい人がいてびっくりしたんです。美術関係者だけじゃなく、息子さんの小学校のPTA関係の方がいたり、高校や専門学校で教えていた学生さんたちも混じっていたんです。美術家のお葬式にそんな人たちまで並ぶなんて思いもしなかった。普段から地域コミュニティの中で、本当に公平に人と付き合っていたんだと知りました。「コミュニティアート」っていう言葉は2000年以降一般的になるのですけど、そういう人材だからこそ、彼は今在るべき存在じゃなかったかと。

ある美術関係のライターの方が、ある文章の中で「中途半端」って

Hosei University Repository

お書きになったんですけど、いろんな意味で早すぎた人だったですね。スタジオ４Ｆ[15]の運営システムとか、日本画の方がちょっと飽きてきて大榎さんたちと、「カウンシル」ってそうですよね。

大榎　僕は入っていない。

村田　そうでしたか。マルチメディア・ユニットで、「これ、売れるかな？」って言ってましたね。マルチメディアに手を出したり、パフォーマンスに近寄ったり。そしてワークショップに移行していくんですが、その動きはすごく早かった。

スタジオ４Ｆは、財団法人設立に必要な資産はない、じゃあ生協のやり方はどうだろうと参考にして非営利で運営していたそうです。宮前さんのお母様が生協の仕事をやっていらっしゃったから生協と美術が結びついたようですが、それでも80年代初頭の日本で、アーティスト・ランのオルタナティブスペースを運営するのに非営利の方法を発想したのは凄いなと思いました。そんなふうに先駆けて気付いてやっていたけれど、時代（の評価）が追いつかず、中途半端で、もったいない人だったと思います。

大榎　92年の『美術／言語』（滋賀県立近代美術館）[16]は「絶対見に来い」みたいなことを言っていた。後で美術雑誌で確認したところ、それまではお祭り状態で、なんかイメージで集めましたみたいな展覧会が多くて、その中では非常にきっちりテーマで集めたものだったんですけれども。その中で、今村田さんから「"Who Are you?"」そっからだったよねって。ああ、そうだったよねってことを話していたんですけど、それ以降、「キャッチボール」みたいなことに展開していく。僕はキャッチボールやっている時、「これは、どうやったってキャッチボールじゃん」ってことを言っていたんだけど。それが92年のそこからなのかというのが、ちょっと今、話していて。

あとね、ロックバンドの話なんですけど、それはかなりまゆつばっていう。いや、ロックバンドやっているんだけど、やっぱり彼の中学くらいの友達でミュージシャンがいて、有名な厚見玲衣っていうキー

Hosei University Repository

ボードやっている、僕が知っているのはVOW WOWっていうバンドにいた、清志郎のバンドにもいたと思うんですけど。中学生のころに彼らと宮前さん、グループ組んでいて、演奏に行くのに朝、みんな神経性の下痢で、緊張してみんな次々にトイレ行っちゃうからなかなか集まらなかったって、そういう話をしていました。彼、すごくフランクに人に話しかけるんだけど、すごい緊張するんですね。

村田　結構、わざと下ネタ話をしましたよね。私は、恥ずかしがり屋だから言っているのかなって。

大榎　僕もすごく共感するんだけど、小田急線で成城学園前から急行列車に乗ってずっと止まんないと思うとトイレ行きたくなって。下北沢のトイレってホームの端っこにあるんですね、それもすごいしょぼいトイレで、おしっこするとこが溝になってる。そこでうんちした話とかね。それから学生のころに新島に行ってナンパして来いって言われて、がんばって成功したんだけど、緊張しまくっていたから、成功したとたんに車の後ろでゲーゲー吐いちゃったとか。

　すごく人に話しかけたりする人だけど結構緊張する。だから、そこから人とどう話していくかとか、すごく戦略的に考えたんじゃないかなと思うんです。それがいろんな仕掛けを考えていく出発点に、その緊張するっていうのが。

村田　いま宮前さんが生きていたら、コミュニティアートで売れっ子になっていたと思うんですけど、かえって「俺、やんないよ」ってそっぽ向いていた可能性もあるかなって気もするんですよね。

稲垣　大榎さん、宮前さん生きていたらどうですか。

大榎　分かんないけどね。周囲で一つ声があったのは、もっと海外に行かなかったのかなって。それは周りの人が何人か言っているんですけれども。果たして、そういう戦略を彼は持てたんじゃないかなと思うんですけど。ちょっとそのへん意識して海外の交換プログラムみたいなことをやっていたと思うんですよね。

会場の男性　バンドの話に戻れば、結構、彼、マジでやっていて。か

Hosei University Repository

なり大マジでやっていましたよ。

稲垣　村田さんは、バンドの演奏とかは？

村田　聞いていないんです、全然。私は宮前さんと初めて会ったのは91年で、福島県田島町のパフォーマンスアート・フェスティバル。顔のおっきい変なおじさんで「誰？」って感じだったんですけど、あの口調、テンポに、気が付いたらお友達という感じでした。

日本画は、彼の初期の作品は、例えば膠（にかわ）を使わずに絵の具をのせたりしていたので保存がきかないという、実にやっかいな作品だったと聞いていますが。

会場の男性　多摩美はわりと平気でそういうことはやれたんじゃないかと。

村田　戦闘機とか描いてたとか。

大榎　潜水艦じゃない？　潜水艦が世界を巡っていくっていう物語。なんか潜水艦の絵があって、その前でとくとくと、これが世界を周ってな、という物語を聞かされるんですけど。

村田　記号論にはまっていた時期があって、覚えたことを一生懸命説明された記憶があるんですけど、全部忘れちゃいました。「トリゴヤ」のスタジオには部屋の半分くらい本棚があって、普段ここで本を読んでいるんだって言っていましたね。その時期は、絵の仕事はしていなかった時期だと思うから、本を読んでいたのかなって気がしますけど。

鈴木　稚内の海に散骨されることを望んだんですけれども、稚内から、もっと国際的な舞台に出ていかないのかってことは聞いたような気がするんですけど。それは、稚内でもどこでもいいんだと。ネットの社会だから、ネットを通じていくらでもできると。東京の病院からネットを使って授業しようとしていたんですね。地域でのアートの関わり、それを世界にアクションしていくことをちゃんと考えていたように思いますね。でかいことを考える人だなと。私は稚内でいいじゃんと思いました。

村田　インターネットに凝りだしちゃったりするのは、ほかのアーテ

Hosei University Repository

ィストに比べてすごく早かったですよね。奥さんがそういう方面のお仕事なさっていた方じゃなかったかな。

大榎　99年にね、僕がネットでラジオをやるみたいな、要するに今のユーストリームみたいなことに参加した時に、何人かのアーティストに協力してもらって、そのうちの一人が宮前さんで、宮前さんの番組みたいなものを作って。それは東京の学生が稚内北星学園に行くんですよ。それで藤木さんに会うっていう設定で、藤木さんの方からネットでまた中継してもらうっていうのをやったんですけど。その時に、それが宮前企画で、宮前さんはそのころ僕が技術職で働いていた今の東京経済大学のスタジオから中継するっていうことをイベントとしてやったんですね。で、その時だったと思うんですよね、確か。これ使えば東京と稚内結んでやれるじゃんみたいな話を2人でしたような記憶があります。それが99年の12月。

　で、最後の5月に会った時に、またその話をしたんじゃないかなという気がしますけどね。それですごく明るい顔になったような気がします。

村田　知りたがりでしたよね。知らないことを言われたら、聞くために相手に接近するみたいなところがあって。そういう意味で、ものすごく嗅覚が鋭かった。

大榎　この資料のどこかにあるんですけど、音声の出る電子装置の作品があるんですよ。「"Who Are you?"」って言ってんのかな。あれもなんか作るって言い出して、僕が手伝ってあげたような気がします。で、最初彼がはんだ付けすると音が出ないんですけど。なんで出ないんだよって怒り出して。「ここ一カ所配線が間違ってる」「一カ所くらいどうにかしてくんないのか」ってことを言いながら、2人ではんだ付けして、あれは結構、数があったんで。

村田　海外に行かなかった理由って、たぶん語学じゃないですか。「俺、喋れねえし」って。今みんな普通に文化庁の在外派遣とか応募して行くじゃないですか。宮前さんの時代って（応募者が少なくて今より）

Hosei University Repository

行きやすかった頃だと思うんですけど、しなかったですよね。同世代の平林薫さんなんかは交換留学でニューヨークに行ったりしてた。そういう姿をうらやましいって思っていたんじゃないかな、口にはしなかったけれども。

稲垣　鈴木先生のお話しを受けてですね、さっき名前が出た藤木さんなんかにもお話しをうかがってみたいなと思います。バンドもちょっとどんなことをやっていたのかなっていう興味がわいてきたし……。

Hosei University Repository

注

1　北海道稚内市にある「日本最北端」の私立大学。情報メディア学部のみの単科大学で平成 12（2000）年に開学。鈴木は 2004 年まで教授として、稲垣は 2003 年～ 2006 年に准教授として在籍。

2　1980 年代ソ連において隆盛をみたアヴァンギャルド・ジャズの重要人物の 1 人。ペレストロイカ以前から前衛的な演奏活動／芸術運動を行ってきた

3　美術家。2005 年まで稚内北星学園大学教授。

4　2007 年まで稚内北星学園大学学長。

5　デビット・K・バーロ（David K Berlo）が提唱したコミュニケーションモデル

6　原岡一馬編、人間とコミュニケーション、ナカニシヤ出版、1990。

7　演出家。「からだとことばのレッスン」と呼ばれる演劇トレーニングを開発

8　稲垣立男、鈴木正美、藤木正則、コミュニケーションと表現：情報メディアにおける表現教育の実践、稚内北星学園大学大学紀要 2005、稚内北星学園大学

9　1994 年と 1996 年に杉並区立和泉中学校で開かれた現代美術展。

10「体感する美術」は、佐倉市立美術館が夏に開催している教育・普及プログラム。宮前は同企画において 1996 年にはワークショップ・メディア・サバイバルゲーム！を、1997 年にはワークショップ・SAKURA　ひストリートファイターを実施している。

11 1994 年に川崎市民ミュージアムで開催された現代美術展。皇室の家族写真を用いた大榎の作品が、スポンサーである富士ゼロックスの検閲によってその部分を隠すかたちで展示された。

12 美術手帖 2000 年 7 月号。

13 斎藤記念川口現代美術館学芸員などを経て現在 NPO 芸術資源開発機構（ARDA）副理事長。

14 漫画家。1981 年多摩美術大学グラフィックデザイン専攻卒業。

15 かつて神田にあった作家による自主運営のギャラリースペース。

16 シガ・アニュアル '92 言語／美術 − Functions of Language in Contemporary Art −、1992 年 1 月 5 日～ 1992 年 2 月 16 日、文字や言葉といった「言語」に注目し、作品にそれらを導入している平林薫、宮島達男、セシル・アンドリュ、リフレイン、宮前正樹の 4 名と 1 組（計 8 名）の作家による企画展。